

2022. 11. 14

報道関係者 各位

< 配信枚数3枚 >

岡山県備前市立日生中学校の海洋学習を3年かけて調査・実証研究を実施
海洋学習が生徒の地域への愛着や意欲関心を高めることを示唆
保全生態学の研究・情報誌に研究成果を発表

立命館大学政策科学部の桜井良准教授らの研究チームは、中学生が漁師と3年間にわたって地元の海で協働作業を行う世界的にも珍しい海洋学習について、2015年よりその教育効果を調べてきました。今回、その集大成として実施した調査より、海洋学習を受けることで生徒が、自分たちが住んでいる地域への愛着を深め、生徒らが将来にわたって地元の海を守ろうとする保全意欲の醸成に影響を与えることを明らかにしました。また、生徒は海洋学習を通して漁師や住民など様々な人と交流をすることで、将来にわたって前向きに生きていこうとする意欲が高まることが分かりました。本研究成果は、2022年10月25日に、一般社団法人日本生態学会が発行する雑誌「保全生態学研究」に掲載されました。

本件のポイント

- 地域への愛着が深まることで将来にわたりその地域を守ろうとする意識が高まるかどうかを検証した
- 様々な人と交流することで生徒の将来に向かって前向きに生きていこうとする意欲が高まった
- 生徒が描写した絵の分析より、高学年ほど海の中の生き物の多様性を理解していることが判明した
- 環境教育プログラムがどのように関係人口の醸成に寄与するのかを示した

< 研究成果の概要 >

本研究では、瀬戸内海の漁師町で行われている海洋学習の教育効果を把握するために、プログラムが行われている岡山県備前市立日生中学校の全校生徒(131人)にアンケート調査を実施した。その結果、海洋学習を通して生徒は地元の海に対する理解を深め、さらに自分たちが暮らす地域への愛着を持つようになり、そのことが将来も地元の海を守っていこうとする保全意欲の醸成に影響を与えることが分かった。同時に、海洋学習を通して、漁師や地元の住民など様々な人と交流をすることで、生徒は卒業後も前向きに人生を生きていこうとする意欲を高めることが分かった。また、生徒が描写した理想の海と現在の海の絵を分析することで、高学年の生徒ほど現在の海の豊かさ(生き物の多様性など)を描くようになるなど、アンケートや聞き取り調査だけでは知ることができなかった多様な生徒の考え方を明らかにすることができた。

< 研究の背景 >

瀬戸内海の沿岸域に位置する日生中学校では、「総合的な学習」の時間を使い、地元の海を舞台とした海洋学習を行っている。子どもたちを対象とした海洋学習は世界中で行われているが、日生中学校の海洋学習は学校のカリキュラムとして3年間にわたって地元の漁師との協働による活動を行うことが特徴で、このようなプログラムは世界的にも珍しい。また海洋学習の教育効果に関する研究はこれまで国内外

で行われてきたが、短期間(数時間～数日)のプログラムについて一度限りのアンケート調査などから測定したものが多く、長期にわたるプログラムの効果について参与観察や聞き取りなど様々な手法を用いて研究がなされることはほとんどなかった。

<研究の内容>

本研究では日生中学校の全校生徒(131人)への意識調査を行い、従来の研究で多く用いられてきたリッカート尺度(例:「そう思う」～「そう思わない」などの回答形式)の項目による質問だけでなく、生徒による自由記述や生徒が描写した絵も分析し、3年間の海洋学習を受けることが生徒にどのような意識の変化をもたらしたのかを調べた。その結果、生徒の地元の海に対する意識、知識、保全意欲について、リッカート尺度による数量的分析からは学年ごとに差は見られなかったものの、自由記述により2、3年生になると「海の大切さを他の人に伝えたい」といった保全意欲に関する記述が増えることが分かった。また1年生は地元の海について「汚い」「緑色」など目に見える海の印象を回答していたのに対して、2、3年生になると「日生の海は魚が回復してきている」などの回答があり、海の現状に関する理解も深まっていたことが分かった。絵の分析からは、3年生は日生の海について多くの生物が生息する豊かな海として描写する生徒が多いことが分かった(図1)。重回帰分析の結果、生徒の海への理解や地元への愛着が深まると、地元の海を守ろうと保全意欲も高まること、また地元の漁師など様々な人と交流することで、生徒が未来に向かって前向きに生きていこうとする意欲が高まることが分かった(図2)。

⑤以下の口の中に今の日生の海の絵を自由に描いてみてください。絵の中に説明文をつけてもらっても構いません。

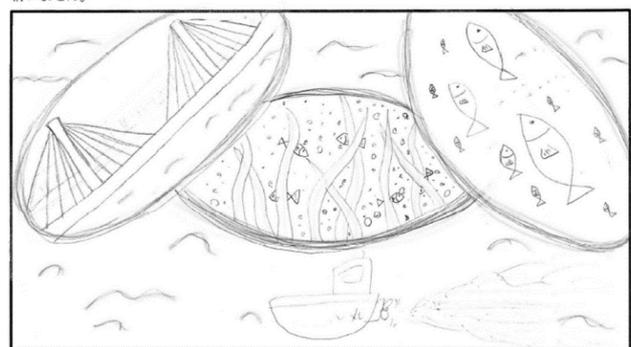
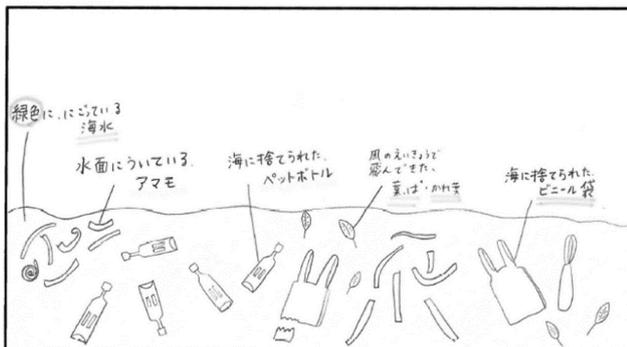


図1. 生徒が描いた絵の例:左は1年生が描いた「今の日生の海の絵」で、ペットボトルなどゴミが描かれている。右は3年生の「今の日生の海の絵」で、アマモが多数生え、魚が多く泳いでいる様子が描かれている。

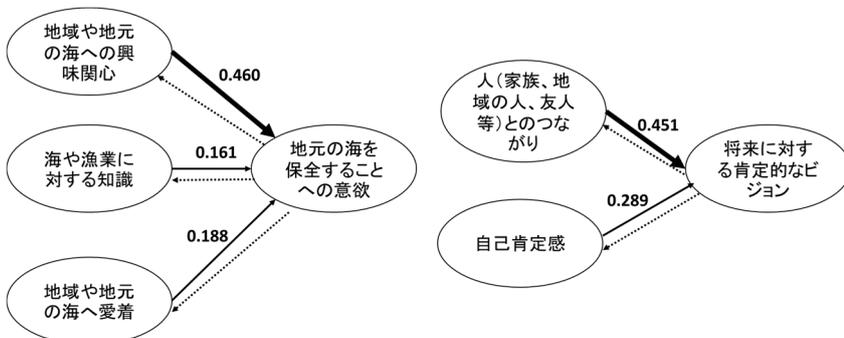


図2. 地元の海の保全意欲及び将来に対する肯定的ビジョンと関係する要因モデル(値は標準化偏回帰係数、全ての関係性は有意[p < 0.05]である。関係が強い[B > 0.4]要因については関連性[矢印]を太字で示した。点線の矢印は目的変数が説明変数へ影響を与えている可能性もあることを示している)。本研究では海洋学習は、生徒が感じる「人とのつながり」及び「自己肯定感」を促進しているという仮定のもと分析をした。

<社会的な意義>

本研究から中学生が3年間にわたって地元の漁師と協働を続けるユニークな海洋学習プログラムが、長期的に生徒の意識や行動にどのような影響をもたらすのかが明らかになった。学術的には、聞き取り、アンケート、自由記述、絵の分析など様々な手法を用い、海洋学習の効果を定性的・定量的に明らかにすることができ、一つの手法(例:リッカート尺度)だけでは分からない要素があること(例:絵を描いてもらうことで、生徒が言語化できなかった海の豊かさを表現できたこと)が分かった。また地元の資源を用いて継続的に行われる海洋学習への参加を通して、生徒が地域への愛着をどのように育み、さらにこれが海を守ろうとする保全意欲にどのように影響を与えるかが明らかになった。

地方における少子高齢化・過疎化の問題はわが国では深刻で、地域の持続可能な発展のために、その地域に関係を持ち関わり続ける関係人口の重要性が指摘されている。本研究の社会的意義は、地域の資源を利用した教育プログラムが関係人口の育成につながることを示唆する結果を得たことである。日生地区には高校が無いので、生徒は中学卒業とともに地区外の高校に通うことになり、大学進学に伴い都心部に引っ越すものも多い。2015年より実施してきた一連の研究では、卒業生(高校生)への聞き取り調査も実施したが、聞き取りをした卒業生(5人)全員が卒業後も日生地域への愛着をもち続けていること、中には高校でも継続して自主研究として海の保全に携わっている生徒がいることも分かった。日生中学校で行われている海洋学習は、教育プログラムを通していかに関係人口を醸成することが可能かを示している。

<研究者のコメント>

2015年に初めて日生地区を訪れ、日生中学校の海洋学習を見学した時に見た漁師とともに活動する生徒の生き生きとした、そして誇らしげな表情が忘れられません。この時に、「このプログラムが生徒にどのような意識の変化を起こしているのかを調べたい」「その先に日本の教育の在り方を考えるヒントがあるはずだ」と思ったのが研究を始めたきっかけです。実際に調べれば調べるほど、日生中学校の海洋学習は奥が深く、生徒の考え方に大きな影響を及ぼしていることが分かり、じっくり腰を据えて生徒に寄り添いながら研究をしたいと思うようになりました。まずは1年間、私自身が生徒と一緒に海洋学習に参加し、この様子を参与観察し、また一人ひとりに聞き取りをすることで、生徒それぞれが持つプログラムへの感想を明らかにしました。その中で、プログラムが着実に生徒の意識変化をもたらしていることが分かってきました。今回発表した論文はその集大成となる研究の成果です。

<論文情報>

論文名 : 海洋学習が行われている中学校の生徒の海に対する態度と保全意欲:自由記述や絵の描写も含めた比較調査より

著者 : 桜井良・上原拓郎・近藤賢・藤田孝志

発表雑誌 : 保全生態学研究

掲載日 : 2022年10月25日(日本時間)

URL : https://www.jstage.jst.go.jp/article/hozen/advpub/0/advpub_2108/_pdf/-char/ja

以上

●本件に関するお問い合わせ先

(研究内容について)

立命館大学 政策科学部 准教授 桜井良

TEL.072-665-2080 Email. ryosak@fc.ritsumei.ac.jp

(報道について)

立命館大学広報課 担当:名和

TEL.075-813-8300 Email. r-koho@st.ritsumei.ac.jp